

## 宇佐のみち（司馬遼太郎「街道を行く」より引用）

### 花イバラ

城下町には、寺町がある。

中津にもある。もともと寺町は織豊時代の城下町づくりの一特徴で、いざ籠城というときの防衛線にするために、寺々を一カ所にあつめておいたらしい。

合元寺がある。

建物の壁も練塀も赤い。

「赤壁」というのは一般に印象的なもので、中国の宋・元のころの寺に多く、江戸期の長崎でたてられた中国ふうの寺も、赤壁である。日本人の好みでいうと、赤壁はかならずしもあわない。

土塀のうつくしさは、奈良の東犬寺界限や法隆寺などが私どもの基準になっているようで、仮りに法隆寺の土塀を赤壁にするとすると、日本じゅうで反対がおこるにちがいない。

赤壁は、まれであればこそ結構なのである。たとえば江戸末期、大坂高麗橋のいまの三越のあたりに赤壁の針医屋敷があつて、明治までつづいていたのだが、針医としてはいかにもよく効きそうな感じだったにちがいない。

また大石内蔵助の伝説で知られる京都西条花見小路角の料亭一力は、いまでも赤壁である。

江戸期らしい唐様をおもわせながら、祇園の情趣にも上く適っている。適ってはいるものの、祇園では一刀をまねて赤壁にする家がないというのも、おもしろい。

さて、合元寺の門前に立っている。

中津市の教育委員会の掲示板がある。

……天正十七年四月、孝高（黒田如水）が、前領主宇都宮鎮房を謀略結婚により中津城内に誘殺したとき、その家臣らが中津城を脱出し、この寺を拠点として奮戦し、最期をとげた。

以来、門前の白壁は幾度塗り替えても血痕が絶えないので、遂に赤壁に塗られるようになった。当時の激戦の様子は、現在も庫裡の大黒柱に刀痕が点々と残されている。

まことに、おそろべき事件である。

宇都宮氏は、その遠祖が、下野（栃本県）の宇都宮から出たことは、いうまでもない。源頼朝が平家をばろばしてから、この氏を豊前国城井郷の地頭職にした。

「宇都宮系図」では文治元年（一一八五）とあり、頼朝の代官の義経が平氏一

門を壇ノ浦で敗滅させたとしてである。そのとしの十一月、頼朝はあたらしい全国統治のやり方として、諸国諸郷に守護や地頭をおいた。一説では、宇都宮氏は豊前国の守護に任ぜられたともいう。

宇都宮代が四百年もこのあたりを統治したことを思うと、そのほろびが多分に時勢のせいとはいえ、ばろびぎわの悲惨さは、なんともいいようがない。この一族は為政者としてわるかったわけでもなく、むしろ善政する家だったともいわれている。

最後の当主宇都宮鎮房は一五三六年のうまれで、天正十五年（一五八七）、秀吉が九州を平定すべくやってきたときは、五十を過ぎていた。とほうもなく大男で、鹿の角でもひきさくような力があつたという。

海山にあふれる秀吉の大軍をみて、

「上方の成りあがり者めが」

という気分もあつたろう。それに、秀吉が豊後（犬分県）の大友義鎮（宗麟）を応援しているのも気に入らなかつたはずである。

さらにいえば、この時代、宇都宮氏のような国人やその配下の地侍は、名子とよばれる農奴を使役してじかに農地経営をしていた。

豊臣政権の天下政策というのには、名子を否定することにあつた。

国人・地侍を廃止し、その農地を名子たちに分与し、自作農として、豊臣大名がじかにかれらから租税をとるという仕組みで、まったく革命そのものだった（豊臣大名は農地経営をせず、租税徴収権をもつだけなのである）。

これに対し、国人・地侍としては俸禄をもらって武家奉公人になるか、農民になるか（この家系から江戸期、庄屋・名主が出た）、それとも第三の道をえらぶかだった。第三の道とは、反乱（一揆）である。九州はとくにかれらの不平で大地が地鳴りするように沸騰してした。

黒田如水が中津を中心とした豊前をもらったとき、この十二万石余の小さい領国のなかで、百数十もの国人・地侍がいて、それぞれの村落で小さな城砦をかまえていた。

それらの大半が、秀吉軍の強大さの前に屈し、如水に付属し、多くが家臣になった。それらは、中津付近より宇佐付近に多かつたようで、時枝氏、宮成氏、広津氏らの名をあげることができる。

が、中津および山国川ぞいの国人・地持は頑強だった。その頂点に宇都宮鎮房がいた。

「ただの百姓にする気か」

と、名家意識からくる憤りが、反乱へのばねになつたろう。

鎮房は、ふるくからの族党である野仲、犬丸、日隈、福嶋、池永、賀来、山田などを従えてたちあがつた。

余談ながら、宇都宮鎮房は、秀吉が九州にきて大号令を発したときも、そのもとに駆けつけず、わずかに息子の朝房を代理としてやっただけだった。

秀吉にとって不快だったろうが、九州を平定したあと、鎮房の名家であることをおもったのか、伊予（愛媛県）の今治に転封すべくとりはからったかのようである。が、鎮房はそれを不快としたのか、ぐずぐずするうちに、秀吉のほうがその気をなくしたらしい。

鎮房は、旧傾のあちこちをさまよううちに、ついに武力抵抗に踏みきった。

大分県は、豊前田と豊後国をもつ。ただし、豊前国の西方が、明治後、福岡県に～～中津の山国川を境界として～～組み入れられた。

（略）

むろん古き豊前人である宇都宮鎮房の場合、大分県や福岡県といった認識はなく、かれは大分側の山国川ぞいを同族の版図とし、自分自身は、福岡県の豊前にある城井谷を根拠地にしていた。

城井谷は、寄手にとってはおそろしい要害であった。城の名は、城井城とか茅切城とよばれていた。まわりがけわしい山々にかこまれ、

「口狭くして内広し」

といわれていた。また形が瓢箪に似ているため瓢箪城ともいわれたという。

いま、築上郡築城町にあり、本城の遺塁にゆくには日豊本線築城駅から南の山中に二〇キロほどふかく入らねばならない。しかも城井谷には入口にも中どころにも宇都宮氏の城砦が多い。まことに、攻めるには難い。

宇都宮鎮房がここに籠もると、上毛、下毛、宇佐などの諸郡の国人・地侍たちは、大いに呼応した。

ところで、肥後（熊本県）でも、国人・地侍が蜂起し、一国がひっくりかえるほどのさわぎがおこっている。秀吉が任命した肥後国主佐々成政への反乱ながら、要するに豊臣体制への国人・地侍による大反撥であった。

秀吉としては、諸大名を動員し、佐々成政に応援させ、まず肥後一国を討伐せざるをえなかった。

如水も軍勢をひきいて肥後に行ったのだが、鎮房としては、その不在に乗じた。

ただ、中津には、如本の子の長政がいた。すでに二十をすぎ、分別はともかく、勇気があり、戦闘指揮においては単純ながら果敢だった。

ただ、軍勢がすくなく、かきあつめても二百ぐらいだったろう。

肥後の如水はなすすべがないまま、上方の秀吉に援軍を乞うた。

秀吉は尾張出身の子飼の毛利吉成（のち勝信）をさしむけた。黒田長政がようやく城井谷を攻めることができたのは、天正十五年（一五八七）も冬になってからだった。

この場合、長政にすれば城井谷を包囲し、砦ごと各個に攻めるべきだったが、大軍をたのみ一気に、直線的に攻め、結果は戦国史上、まれなほどの惨敗を喫した。主だつ者が多く討たれ、死者は九百に近かった。宇都宮方は戦勝を誇示するため、城井川上流の櫛原のあたり二キロ半にわたり、八百六十四級の首を掛けならべたといわれる。これに対し、天険に拠る宇都宮方の死傷はほとんどなかった。

このときの黒田方に、後藤又兵衛基次がいた。かれは後年、如水の死後、黒田家を退転して牢人として天下の名士になるのだが、このとき三十前ながら、すでに戦の名人といわれた。それほどの男でも、重傷を負って後送された。

ついでながら又兵衛は如水の旧友の遺児で、少年のころからその薫陶をうけ、長政以上に愛された。

そういうこともあって、長政とはそりがあわなかったが、かれが決定的に長政をきらうようになるのは、この城井谷での敗戦からだという。

肥後でこの惨敗をきいた如水は、重臣を秀吉のもとにやって相談させた。どうやらこのとき調略によって鎮房を謀殺するという話がきまっただけらしい。

秀吉は、子供相手のようなだまし方をした。開白の名において旗本の大東大内蔵、山口玄蕃頭正弘（検地の名人といわれた）がくだってきて、鎮房に、豊前において諸侯にする、と約束したらしい。ただ、講和のしるしとして、鎮房の娘鶴を黒田長政に嫁がせる、という件もあったというが、あるいは伝説のたぐいかもわからない。長正には正夫人蜂須賀氏がいたのである。

武士は嘘をつかない、というのが鎌倉以来の風で、古い家系にうまれた鎮房はそのように信じて生きてきたようである。

ただし戦国も末期の統一期に入って政略がさかんになると、調略と称するうそが横行した。鎮房は、そういう世だということを知らなかったのだろうか。

戦いは凍結され、翌マ年の大正十七年三月二十六日、ふたたび関白秀吉から教書が鎮房にくんだり、中津城において長政と対面せよ、とやってきた。嫡子宇都宮朝房に対しても肥後への公務出張を命じた。肥後一揆はこの前々年、一揆側の敗北におわっていた。さらには、豊後一揆も、黒田側が軟かな小城からつぎつぎにおとし、鎮房から手足をもぎとっていた。

このたい勢のなかで、鎮房としては、秀吉の教書を信ずることに賭けざるをえなかったのかもしれない。裏切られることも覚悟していたらしく、この時期の進退にみだれがないのである。

子の朝房の”公務”は肥後の検地を監察するという役目で、二十数騎を従えて山々を越え、肥後に入った。肥後木葉に入ったとき新しい肥後のぬしの加藤清正の手勢に襲われ、奮戦して全滅した。十九歳だった。

どうも肥後の清正までが動員されていることをみると、宇都宮氏討滅の謀略の網は大きかったようである。

長政は、城にやってきた鎮房に酒食を供し、そのさなかになにかに殺した。

また合元寺で待たせてあった鎮房の手勢については軍勢をさしむけ、みなごろしにした。

その血しぶきのあとが壁のあちこちにのこり、事件後、幾度塗りなおしてもなおあらわれるので、寺ではついに赤壁にした、というのが、合元寺伝説である。

話が、かわる。

薔薇の花というのは、ヨーロッパでは、ギリシア・ローマのかかしから花の王とされてきたが、明治以前、日本の民間では好まれなかった。

日本の民間では単にイバラ・ウバラ・ウマラ（茨）にすぎず、そのトゲが忌まれた。いまでも、仏前の花にバラが用いられることは、まったくない。

地方によっては、死者の怨みを弔するとき、野イバラの花一枝を上に乗す風習があるらしい。

明治の史伝家の福本日南（一八五七～一九二一）は筑前福岡の黒田藩の家士の家にうまれた。明治初年、南部藩の原敬や津軽藩の陸かつ南らとともに司法省法学校に入り、数年で連袂退学した。以後、政治家になったり、新聞社主筆になったりしたが、かたわら、史伝を書いた。かれは藩祖如水がすきで、明治四十四年、東亜堂書房から『黒田如水』を刊行したが、そのなかの「城井谷の懐古」のなかで、鬼気せまる話を書いている。

その話は、江戸末期、豊前中津で成人した福沢諭古がこういつていた、というのだが、直接ぎいた活かどうかは、不明である。

ともかくも城井谷の風習として、毎年、鎮房父子の非業の最期の日、村の老若男女がみな遺墨にのぼり、手に手に花イバラの一枝をもち、うらみをとえつつ土に挿すというのである。

旧藩人である福本日南も、鎮房をだまし討ちして多くを虐殺したことを、「蛮拳」としている。さらにこの拳は、如水一代をつらぬいている清涼な気分からいうと、文脈として適いにくい。

また江戸中期の黒田藩の大儒で百科全書的な文筆家でもあった貝原益軒（一六三〇～一七一四）も、その著、『黒田家譜』を書いてこのくだりになると、筆が苦澁をきわめるのである。

この件は、黒田家では当然ながら記録をのこしていない。このため伝説や伝承が多い。黒田家が関ヶ原のあと、筑前福岡に転封になってから、中津付近ではさまたまに語りつたえられ、尾鱗もついたのであるかもしれない。

諸本をみてはっきりしていることは、宇都宮鎮房もその子朝房も、また城にいて変事を知ったのち自害をした八十歳の鎮房の老父長甫も、みな堂々としていさぎよかったことである。

鎌倉以来の武士道は、中央から遠いこういう家にのこっていたのかもしれない。

合元寺境内に入ると、せまい敷地に建物が多く、いずれもがずっしりと瓦屋根を冠っていて、鎧武者がひしめいているようでもある。寺の若い跡とりらしい人が作務衣姿で通りかかって、私に浄土念仏の主唱者だった法然上人のことをみじかく言った。法然の名が出たことでも、この場ではとりあえず宇都宮鎮房らへの供養になるようにも思えた。

法然もすべてを捨てた人であり、一遍も捨て聖といわれた。鎌倉の御家人であった熊谷直実はすべてをすてて法然の弟子になった。鎮房らもまた、命をすてることで、諸欲から離れた、と、この浄土宗の寺の軒下ではおもうしかない。

(略)

中津市域の南東にある池永という地にも宇都宮方の地侍 池永重則が城館をもっていたが、如水はこれも攻めつぶした。また、中津の南の加来という地に大畑（大簾）城があり、旧式ながら堅城といわれていた。如水はここに籠もる宇都宮方の加来安芸守統直に対し、糧道を絶って猛攻し、落城させた。これらの城々の用材も、おそらく中津へ運んだろう。

(以下省略)